
バレンタインday ~ 僕と俺の甘いチョコ ~

彩瀬姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バレンタインday 僕と俺の甘いチョコ

【Nコード】

N1576G

【作者名】

彩瀬姫

【あらすじ】

BL。付き合っ^て初めてのバレンタインなのに、僕の彼氏——大^ひ翔^ろはチョコを受け取ってくれなくて……。

（前書き）

このお話はボーイズラブです。苦手な方はご注意ください。

「チョコ、いらない。それにバレンタインなんて女が男にあげるものだろ」

僕の彼氏——大翔は、僕が作ったチョコをあつさりと断る。

まあー予想していたけどね。

僕——響^{ひびき}と大翔が付き合い始めて、初めてのバレンタインデー。それに便乗^{びんじょう}してもらってくれないかなあと思ったが、それは夢い夢となったようだ。

「はいはい、わかりました。もういいよ。無理言つてごめん」

僕は下を向いた。大翔に今の顔を見せたくなかったから。きっと今、僕は泣きそうな顔をしているだろう。

いつものことだけど、ショックだった。

付きあつて約半年。大翔が僕に好きって言ってくれたのは一回。

僕が告白した時に「俺も好きだ」の一回だけだった。

不安なんだ。

本当に大翔が本当に僕のこと好きなのか分からない。今の僕をどう思っているのかを知りたい、でもそれを訊いても大翔は言ってくれないだろう。大翔は照れ屋だから、絶対に言わない。

「じゃあさ、これはどう？バレンタインぼくないでしょ？」

僕は、フルーツがたくさん入ったゼリーを大翔に差し出した。

もちろんこれも手作りだ。

きっとバレンタインっという行事に敏感になっているとしたら、ゼリーならって思ったんだ。

でも大翔は「いらない」と言う。

「俺は甘いものが大嫌いなんだ」

僕のこと、わかってくれないんだな。

男同士だって、こうゆうイベント大切にしたい気持ちだつてある。嫌いでも貰ってくれたつていいのに……。

僕は太翔の優しいところを好きになったんだ。不器用だけど、心配してくれたり、失敗しても次頑張れって応援してくれたり、勉強で分らないところを教えてくれたり……。

でも付き合うようになってから、そうゆうことがめっきり減った。デートはするけど、大抵はファミレスでご飯を食うだけだ。遊園地なんて一度も行ったことない。

—— やっぱ釣り合わないのかな僕達。

最近よくそう思うようになった。

もしかしたら、太翔は僕の告白を断れなかったのかもしれない。太翔は優しいから僕の気持ちを考えて……好きってしょうがなく言ったのかもしれない。

「……」

「おい?! どうした?」

突然、黙りこんだ僕を心配して声を掛けてくれた。僕は下を見ているから太翔の表情はわからないけど、どことなく焦っているように聞こえたのは気のせい?

「別に何でもないよ」

「じゃあなんで泣いてるんだよ?」

「ええ?!」

慌てて頬に触ってみるが、濡れた感触はなかった。

その仕草を見た太翔は首を横に振った。

「そうじゃない。さっきからお前、下を向いているだろう? 悲しいことがあった時にするお前の癖だ」

自分でも気付かなかった癖。僕のことをよく見ていてくれたという証。

それを聞いて僕はとんでもないことに気づいた。

—— 全然わかっていないのは僕の方だってことに。

「ねえ? 僕のこと好き?」

僕は訊いてみた。

「好きだよ」

すんなりと答えが返ってきた。

大翔の顔はうつすら赤く染まっている。

何だ……。こんなに簡単だったんだ。

自分から訊けばよかったんだ。大翔は照れ屋だからそんなことを絶対言わない、と勝手に思い込んでいたんだ。

調子に乗って、もう一つ聞いてみた。

「じゃあ何が好き？今度は大翔が一番好きなものにするし」

「響がいい」

「ええ？」

「さっきも言っただけど、響が一番好き」

その言葉を聞いた瞬間、僕の体から汗が一気に噴き出した。

こんなに恥ずかしい台詞を聞くとは夢にも思わなかった。大翔も恥ずかしかったのか、さっきより顔が赤くなっている。

僕は笑ってしまった。

「可愛いな、もう」。大翔の新たな一面発見！

それを聞いた大翔はムスツとする。

拗ねているのかな？

そう思うと、どうしようもなく可愛くて仕方がない。

「可愛い！大翔、すごく可愛い……んう？！」

大翔は僕の口をふさぐようにキスをした。

唇と唇が触れただけのキスだったのに、大翔はすぐに離してしまっ

た。なんで？と大翔の顔を見ると、いつになく真剣な目で僕を見てい

た。「俺はな、チョコよりもずっとお前の方が食いたいよ」

甘々な台詞に僕は瀕死。

…チョコは食べてもらえなかったけど、それでもいい。

——だって、僕達自身が『チヨコのように甘い存在』なのだ
から。

（後書き）

ベタだなあ〜と、自分自身思いました。

こつゆうの書いたことがなかったので、楽しかったです！！

感想頂けると嬉しいです

最後まで読んでくださって、有難うございました（*^|^*）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1576g/>

バレンタインday～僕と俺の甘いチョコ～

2010年10月15日21時44分発行